

「ご苦労さま」の使用と「恩恵」

——外国人学生の「ご苦労さまでした」をめぐる——

梅林 博人

一、はじめに

授業後に、先生に「ご苦労さまでした」と言うのは、なぜ不適切なのか。

外国人学生のこうした疑問に対して、酒入、他（一九九二）は、次のように解説している。^{1）}

まず問題になるのは「ご苦労さまでした」という表現は、相手の労をねぎらうための表現だということとです。つまり、「ねぎらう」ということは、下の者が上の者に対して何か労力を提供した時、それに対して上の者が使える言葉なのですから、教師と学生という関係では不適当ということになります。

次に、相手の仕事を評価するということも問題と

なります。（中略）目上の人を、「よい」「悪い」と客観的に評価して相手に告げるという習慣を私たちは持ちませんから、大変不遜に響いてしまうのです。

では何と言うかが問題となりますが、授業のように恩恵の度合いが高い場合、やはり「ありがとうございます」という感謝の表現が一般的であり、かつ安全です。（二七六ページ）

この解説はわかりやすいので、特に教育現場では有用であるように思う。

しかし、ねぎらいよりも感謝の表現のほうが適切という用例を複数見みると、この外国人学生の疑問に対しては、上下関係にとられない別の説明も可能なのでは

ないかと思われる。

そこで拙稿では、「ご苦労さま」の用法を観察し、「恩恵」に注目して、右の疑問に対する別解を考える。そして、結論として、「話の場で取り上げられている労務から恩恵をたまわっている当事者は、その労務に関する内容に対して「ご苦労さま」は用いない」という私見を述べてみたい。

二、ねぎらいと感謝

「ご苦労さま」に関しては、「ご苦労さま（ねぎらい）」は不適切で「有り難う（感謝）」は適切という場面が少なくない。先の外国人学生の例も含めて以下に例をあげる。（筆者の内省で、自然な用例には○、不自然な用例には×を付す。以下同様）。

- ① ア×授業後、外国人学生が先生に「ご苦労さまでした」と言う。

イ○授業後、外国人学生が先生に「有り難うございました」と言う。

- ② ア×電車で席を譲ってくれた中学生にお爺さんが

「ご苦労さま」と言う。

イ○電車で席を譲ってくれた中学生にお爺さんが「有り難う」と言う。

- ③ ア×道で落とし物を拾ってくれた中学生に大学生が「ご苦労さま」と言う。

イ○道で落とし物を拾ってくれた中学生に大学生が「有り難う」と言う。

- ④ ア×開店祝いに来てくれた知人に店主が「ご苦労さま」と言う。

イ○開店祝いに来てくれた知人に店主が「有り難う」と言う。

- ⑤ ア×購入ミスの切符を交換してくれた駅員に客が「ご苦労さまでした」と言う。

イ○購入ミスの切符を交換してくれた駅員に客が「有り難うございました」と言う。

- ⑥ ア×手術をしてくれた医者患者が「ご苦労さまでした」と言う。

イ○手術をしてくれた医者患者が「有り難うございました」と言う。

いずれも、ねぎらいは不適切で感謝が適切な場面であ

る。外国人学生の事例も、これらと同様である。したがって、冒頭の外国人の「ご苦労さまでした」(＝①)がなぜ不適切なのかは、②③⑥の「ご苦労さま(でした)」がなぜ不適切なのかを考えればわかることである。

そしてこの場合、まず承知しておくべきことは、世間で言われているような俗説——「ご苦労さま」は上の者から下の者へは使えるが、下の者から上の者へは使えない——では説明し難いということである。それは一目瞭然である。②③では、お爺さんや大学生は、目上であつても中学生に「ご苦労さま」とは言えない。

したがって、なによりまず、上下関係という観点から離れることが肝要となる。

三、恩恵とねぎらい

解決のヒントは、冒頭の引用内の「恩恵の度合いが高い場合、やはり「ありがとうございます」という感謝の表現が一般的」という指摘であろう。

分かりやすい⑥の医者と患者の例で考えてみる。⑥では、患者は、医者の提供する労務(治療)によって利益(病気の快方)を得ているから、そこで恩恵をこうむっ

ている。したがって、感謝の表現「有り難うございました」が自然となる。この場合、医者の治療行為がどんなに労力を要するものであったとしても(たとえば大手術)、患者が、医者の労力をねぎらわんとして「ご苦労さまでした」と言うようなことはない。

つまり、話の場で取り上げられている労務から恩恵を受けた場合には、感謝の言動を優先し、ねぎらいの言動は抑止するという表現行動を取っているということになる。端的に言えば、恩恵を受けたら、まずお礼、ということであろう。

こうした観点で、他の例も見てみよう。

⑤の場合は、客は、駅員の提供する労務(切符交換)によって利益(新券の入手、ミスの不問。手数料無料だろう)を得ているから、そこで恩恵をこうむっている。したがって感謝の表現が自然となる。

④の場合は、店主は、知人の提供する労務(開店祝い)によって利益(祝福、お祝いの品など)を得ているから、そこで恩恵をこうむっている。したがって感謝の表現が自然となる。

③の場合は、大学生は、中学生の提供する労務(気づき、拾得、手渡し)によって利益(遺失の回避)を得て

いるから、そこで恩恵をこうむっている。したがって感謝の表現が自然となる。

②の場合は、お爺さんは、中学生の提供する労務（気づき、声かけ、起立）によって利益（着席）を得ているから、そこで恩恵をこうむっている。したがって感謝の表現が自然となる。

そして、最後に問題の①である。この場合も他の例と同様である。①の場合は、学生は、先生の提供する労務（授業）に参加し、そこから利益（知識、技能など）を得ているから、そこで恩恵をこうむっている。したがって、ねぎらいの表現「ご苦労さまでした」ではなく、感謝の表現「有り難うございました」の使用が自然となる。このように、恩恵をこうむった場合には感謝の言動を優先し、ねぎらいの言動は抑止しているという説明で、冒頭の外国人学生の疑問には対応できるのではないかと考える。

四、「ご苦労さま」の使用がゆれる場合

最後に、「ご苦労さま」の使用がゆれる場合について、これも、恩恵の観点から考えてみたい。この使用のゆれ

については、中田（一九六五）が次のように言及をしている。

御用聞きが注文した商品をとどけてくる。時によつては「御世話さま」でよし、時によつては「御苦労さま」でよい。特別の無理な注文を聞きとどけてくれた謝辞と日常の商業行為とは当然少し違つていてよいようだ。（中略）

郵便配達夫は、彼の公務をつくしているのだから、「御苦労さま」でもよからうが、「御世話さま」といえば、配達夫という相手から庇護恩恵を受けたという感じが現あらわわれてくる。つまり「御苦労さま」でよいところを、ウェットに「御世話さま」というのも悪くはないようだ。（一七ページ）

この言及を参考にして、次の作例をしてみる。

⑦ ア○書留を初回配達で受け取り、配達員に「ご苦労さま」と言う。

イ○書留を時間外再々配達で受け取り、配達員に「有り難うございます」と言う。

書留を受け取る時、状況により「ご苦労さま」が使いやすい場合と使いにくい場合がある。

使いやすいのは⑦アの初回配達での受け取りで、これは中田氏の「日常の商業行為」にあたる。特殊な配達をしてもらっていないので、特別感もなく、庇護恩恵感もない。恩恵の度合いは低く、したがって、「ご苦労さま」は抑止されず、使いやすい。

使いにくいのは⑦イの時間外再々配達での受け取りで、これは中田氏の「特別な無理な注文」で、「庇護恩恵を受けた」場合である。恩恵をこうむっているから、ねぎらいよりも感謝が優先され、したがって、「有り難うございます」となる(中田(一九六五)では、謝辞は「御世話さま」があげられている)。

恩恵の観点によって、「ご苦労さま」のゆれも考えやすくなると言えよう。

五、おわりに

以上、「ご苦労さま」の使用の可否を、「恩恵」に注目して考えた。結論は、「一、はじめに」で記したので、ここではくりかえさないことにする。

今回の考察を通じて、「ご苦労さま」には、誤解されやすい側面があることを実感した。その一つに、感謝とねぎらいの区別がある。すでに、岡本・多門(一九九六)でも指摘されているが、「ご苦労さま」は、「ねぎらっているが、「ありがとう」のように感謝を明示しているわけではない」(一〇三ページ)。

「お疲れさま」とセットにして挨拶語として使うことを考えるよりも、まず、こうした語義の理解が言語運用の上では必要であるように思われる。

【注】

- (1) この解説は、Mizutani.O. & Mizutani.N.(一九七七)を参照したものと思われる。

【参考文献】

- 飯間浩明(二〇〇三)『遊ぶ日本語 不思議な日本語』
岩波アクティブ新書 七三〇七八ページ
梅林博人(二〇二二)「言葉の迷信と場面の考慮―
「ご苦労さま」の用法をめぐる―」『相模国文』第
四九号 相模女子大学国文研究会

岡本真一郎・多門靖容(一九九六)「ごくろうさま」の使用の状況的规定因」『日本語教育』九一号 日本語教育学会

北原保雄編著(二〇〇五)『続弾！問題な日本語』大修館書店 一六〇～一六二ページ

倉持益子(二〇一一)「御苦労」系労い言葉の変遷」『明海日本語』第一六号 明海大学日本語学会

国立国語研究所(二〇〇四)『新「ことば」シリーズ17 言葉の『正しさ』とは何か』一一〇～一一一ページ

酒入郁子、他(一九九二)『外国人が日本語先生によくする100の質問』バベルプレス 二七六～二七七ページ

中田祝夫(一九六五)「言語時評 「御苦労さま」と「御世話さま」」『言語生活』十一月号 筑摩書房

中山緑朗、他(二〇〇九)『みんなの日本語事典』明治書院 一一六～一二七ページ

文化審議会答申(二〇〇七)『敬語の指針』(https://www.bunka.go.jp/seisaku/bunkashingikai/sokai/sokai_6/pdf/keigo_tousin.pdf)

文化庁(一九九六)『新「ことば」シリーズ4 言葉に

関する問答集—敬語編(2)—』四六～四七ページ
Mizutani,O. & Mizutani,N.(一九七七)『nihongo notes
1』Japan Times (pp.116-117)

(本学教授)